日本行動計量学会会報
第23号
1981年4月2日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

一九八十年代の役割と期待

河口至商

行動計量学会には「創立と同時に入会した」と云いたいところだが実際にその存在を知ったのは少し後である。何の躊躇もなく入会したのは我ながら不思議と思うのだが、学際的な学会であることと人間の行動が研究の対象であり、それを「計量的」すなわちコンピュータとも関連を保ちながら研究を進めるという主旨に共感を覚えたからである。人間の勘をたよりに推論するだけでは複雑に入りくんだ学際的な研究には納得のゆかないものが多く、やはり数量化を通して種々のモデルを駆使しながら分析を行ない、試行錯誤を繰り返してはじめて目的を達するものと思われる。ところで話が代るが、現在進行している第二次産業革命と呼ばれるものはエレクトロニクスの生んだ花形役者、コンピュータが中心的な役割を果たしている。それに伴うコミュニケーション方式や制御システムの飛躍的発展によってあらゆる分野にインパクトを与え産業構造から社会機構に至るまで大変革が行なわれ、二〇〇〇年代は勿論、十年後の一九九〇年代でさえその予測は非常に困難になってきている。さらにエレクトロニクス関連技術および光ファイバー通信等の新しい技術が次々と開発されこれらのハードウェアの発展とソフトウェアの発展とは密接な関係にあり、ソフト技術者はまた次々と新しい技術を考案している。この産業革命およびそれに伴う社会的変動は好むと好まざるに拘らず全人類を呑込んでしまうものと考えられ、予測される社会的な大変化としてはコンピュータダイジェスト十二月号の記事（新コンピュータ革命）によると、①中間管理職の消失傾向、②ブルーカラーとホワイトカラーの差の減少、③労働者の転職回数の増加、④パートタイムの増加、等があげられるとある。しかしこのような社会的影響よりももっと恐ろしいと思われることは①プライバシー・セキュリティの問題に代表されるように人間そのものが精神的苦痛等により破壊される心配があること、②コンピュータ・セキュリティの問題に代表されるカタストロフ的な大事故やその恐怖から来るノイローゼ等人間自身の存在が危殆に瀕するおそれさえあること、である。

一番大きく変化するものとしてはあらゆるコミュニケーションの発展があげられる。そして我々はその恩恵に浴すると同時に情報過多とそのインサイト過多に悩むことになるだろう。電話嫌いやテレビ嫌いな人間が出てくるのは当然でありこれがますます増加するようになると思われる。あまりにも発達が速く革命的であるので、社会組織や人間関係にひずみがおこり破綻をきたすおそれがある。勿論人間には順応性があり、このような変化が徐々にくれば、あるいは覚悟を決めておれば案外大丈夫なのかもしれないが、よほどの強靱な神経を必要とする。問題はいかにこれをコントロールして自分に必要な情報だけをとり入れるかであろう。そのシステムは各人または各企業によって異り、そのニーズによってそのシステムを考えるべきである。これは非常に難しいことなのでプロのコンサルタントも必要になってくるだろう。

このような社会情勢において、行動計量学会の果たす役割はますます重大な段階に入って来たものと思われ、学会に対する期待も甚だ大であるというべきではなかろうか。

（日本行動計量学会理事・北海道大学工学部情報工学教授）

これまでの月例シンポジウムをふり返って

新年度が始まろうとしておりますが、この時期に、これまでの学会活動の一部を総括してみるのも、一興かと思います。

月例シンポジウムは、昨年秋のものまでで、既に、二十八回催されています。昭和四十八年に始められて以来、多い年は五回、少ない年でも三回のペースで、開催されています。以下、総合テーマ、オーガナイザー、開催期日について、リストアップしてみました。

第一回・「行動計量学の課題」（山本俊一）・四十九年一月。
第二回・「因子分析法」（青山博次郎）・四十九年四月。
第三回・「パターン認識」（飯島泰蔵）・四十九年七月。
第四回・「健康の計量化」（山本幹夫）・四十九年十月。
第五回・「非数理系における行動計量学の教育」（池田央）・四十九年十二月。
第六回・「予測」（古川俊之・井上通敏）・五十年二月。
第七回・「システム」（近藤遼）・五十年四月。
第八回・「芸術とコンピューター」（豊川裕之・安本美典）・五十年六月。
第九回・「分類」（水野欽司）・五十年十月。
第十回・「地域分析の諸問題」（安田三郎）・五十年十二月。
第十一回・「データ解析とモデル」（奥野忠一）・五十一年二月。
第十二回・「システムシミュレーションと人間」（渡辺茂）・五十一年四月。
第十三回・「分布」（印東太郎）・五十一年七月。
第十四回・「あいまいさ」（寺野寿郎）・五十一年十一月。
第十五回・「集合行動の解析」（木下富雄）・五十一年十一月。
第十六回・「マーケット・セグメンテージョンの理論と戦略」（井関利明）・五十二年五月。
第十七回・「学習のメカニズムと理論」（大泉充郎）・五十二年七月。
第十八回・「医学と統計」（開原成允・豊川裕之）・五十二年十二月。
第十九回・「教育データの計量」（脇本和昌）・五十三年五月。
第二十回・「システムと情報」（大泉充郎）・五十三年五月。
第二十一回・「正気と異常」（加藤正明・林俊一郎）・五十三年七月。
第二十二回・「行動計量学の方法論をめぐって」（林知己夫）・五十三年十一月。
第二十三回・「臨床と疫学における意志決定とその数理モデル」（梶谷文彦）・五十四年一月。
第二十四回・「計量政治学」（関寛治）・五十四年五月。
第二十五回・「環境問題とその計量化」（山本俊一・浅井晃）・五十四年十月。
第二十六回・「教育工学における計量モデル」（永岡慶三・脇本和昌）・五十五年二月。
第二十七回・「フランスにおける“Analyse des Données”」（林知己夫）・五十五年五月。
第二十八回・「災害」（広瀬弘忠）・五十五年十一月。

第11回講習会の記録

昭和五十五年十一月五・六日、南青山会館（東京）、講師・林知己夫（統数研）、上笹恒（筑波大）、杉山明子（NHK）、丸山久美子（青学大）の4氏、受講者四三名。

〃〃

月例シンポジウム記録

○第二十八回〃災害〃（オーガナイザー広瀬弘忠・東女大）
昭和五十五年十一月八日、統数研、参加者二三名。

学会誌バックナンバーの購入

希望する巻・号名を記入し、代金と送料を郵便振替（4ページ参照）で、お送りください。

◇行動計量学1巻1号（八百円）
2巻1号・2号（各七百円）
3巻1号・2号（各千円）
4巻1号　（千五百円）
4巻2号・5巻1号・2号　（各千七百円）
6巻1号　（千二百円）
6巻2号・7巻1号・2号　（各二千円）

◇Behaviormetrika
№1～№8　（各二千円）

◇送料　一冊（二百四十円）、三冊まで（三百五十円）

役員選挙をお忘れなく！

本年度は、役員（理事・監事）の選挙の年。正会員には投票用紙が送られます。棄権なく、ご投票を。準会員は選挙権がありませんので念のため。

会議議事録

◇理事会（一月十九日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　十名

1. 本年九月三日から三日間、名古屋大学で開催される第九回大会について事務局より説明。昨十二月下旬に実行委員会（委員長内田良男氏・名大教）の初会合があり、大会の概要を決め、準備を進めている。全会員への〝大会案内〟は例年どおり四月上旬に配布される。

2. 五十七年度の第十回大会は、記念大会とする案を含め大会担当の野元理事を中心に検討し、早期に具体的な準備に入るものとする。開催地は東京を予定。

3. 五十六年度早々に行われる次期役員（理事・監事）選挙に関し、選挙管理委員会を発足させる。選挙管理委員は、駒沢勉（統数研）、安本美典（産業能率大・経営情報）、松原望（筑波大・社工）の3氏とする。

4. 本年度の学会経理状況について事務局より中間報告。会員の協力で、収入は当初予算額を越え、他方、支出は各部門の節減努力で当初の見込額を下回っており、健調といえる。例年度なみの次年度繰越額が見込まれる。

5. なお、事務局報告の会費納入状況に関連して、従来、長期の滞納者、連絡不通者に対する除籍細則を欠いていたのを改め、「理事会申し合せ事項」として成文化し、これに基づき四七名を除籍した。正当な「退会」によらず、本事項の適用で除籍された者の再入会は原則として認めない。

6. 運営、編集（欧・和）、刊行物の各部門担当理事より、活動報告。また、研究企画担当理事より、今後の新しい活動案について説明があり、運営全般に関して、種々意見を交換。欧文誌№9は予定通り本年度内に配布できる見込。和文誌8巻1号、2号は発行が遅れているが、極力、遅れの解消に努める。また、懸案の「シリーズ刊行」が来年度より開始され、収益の一部は学会会計に繰入れられる。今後の方向として、他学会との共同事業や、夏季合宿セミナーの開設などが論議された。

〝学会誌〟へ〝論文〟投稿〟を！

⊙欧文誌、和文誌ともに、年二回発行です。論文の投稿を歓迎いたします。いつでも受付けています。

⊙欧文誌の投稿要領は既刊誌のウラ表紙のウラを、和文誌の投稿要要はオモテ表紙のウラを、ご覧ください。

⊙なお、和文誌への投稿では、学会専用の原稿用紙（有料）が必要です。代金は一冊（五百字詰・五十枚）が三百円です。ご入用の方は送料（二冊まで三百五十円）を加えた金額を郵便振替（4ページ参照）でお送りください。

事務局から

♥師走のある日、ある準会員の母親から抗議の電話があった。滞納会費の請求に応じられない、という。息子はとっくに就職して家に居ない。学会誌が送られてくるが迷惑だ。いつも屑箱に捨てている。もう、送るのは止めてくれ、と強硬だ。私は応酬する。それなら、息子に「退会」するよう伝えてくれ、しかし、滞納分は納めて貰わねばならぬ。当然のことである。

母親はいう。「滞納してれば発送を止めるのが世の中の常識じゃないですか。それをしないで、会費を払え、とは何事ですか。あんたは無責任ですよ。」

♥ここで私は絶句した。なんということだ。無責任はそっちじゃないか。なぜ早く退会連絡をしてくれないのか。

♥そもそも、滞納・即・発送停止で話がすむなら、担当者は楽でよいのだ。だが、それで本当によいのか。学会は商売ではない。少々の滞納は会員の善意を信じて待つ、それが良識ではないのか。でも、母親のいう〝常識〟を逆用して、滞納を暗黙の退会通告としている会員が他にもいたら……私はゾッとした。善意への期待はいたずらに損害を重ねるだけだ。どうしたらよいのか。ともあれ、会費を払う意志がなく連絡もしない不良会員に貴重な学会誌を渡すわけにはいかない。

♥私は暗然たる思いで、この無責任息子を「退会扱い」にした。学会には損害を与えてしまった。その日一日、師走の乾いた風が、胸の中を吹いた。（水野）

学際科学の国際会議に参加して

白崎　和夫

昨年の末に、フロリダでおこなわれた学際科学の国際会議の招待講演で、二週間ほど米国各地を、まわってきました。会議では日本の人口問題について語ってきましたが、参加者は、哲学、政治学、物理学、医学など、いろいろな分野からで、文字通りの学際科学の国際会議で、ノーベル賞学者も数名いる格調の高いものでした。七年前の滞米の際の研究所の連中と旧交をあたためてきましたが、彼等との語りあいでも、国際会議の雰囲気でも、これからの科学の潮流は学際科学が主流をなすという印象で、行動計量学会の使命の重大さを強く感じました。米国とソ連の難しい時代を迎え、日本が仲にたって世界をリードせねば人類の発展はないという印象を持ちました。科学や医学は中立ですから、我々がしっかりとスクラムを組んで、国内的にも国際的にも刻苦勉励、頑張っていかなければという思いを強くしました。（日本行動計量学会会員・東大・医学部）

会員の声

身振りを記録したい

杉戸　清樹

言語調査にでかけて録音テープをまわす。帰ってきて文字化作業をする。「……そうそう、これぐらいの旗を、こんなふうに振りまわしたもんだ……。」それなりに相当精密なところまで、文字化はできる。しかし、である。

「これぐらい」とはどれぐらいか？「こんなふうに」とはどんなふうにか？もどかしいのである。音が聞こえ、文字になおせても、本当のところ何を伝えているのかは、わからない。身振りがついていたはずなのだ。

そこで、調査にビデオ・レコーダをかついでいく。帰ってきてモニタを穴のあくほど見つめる。

両手を肩幅くらい広げた、か。旗は頭の前で斜めに交差させて振る、か……。少しわかってきた。

つまり、音声言語ならざる媒体——身振り、手振り、姿勢、表情対人距離などによるコミュニケーション行動を、〝記録〟したいのである。

相手は生身の人間。それもできるだけ自然な行動の記録がほしい。電極をベタベタくっつけたりなどしたくない。身振りは三次元でアナログス。記録媒体は基本的に二次元で、ディジタルなところから出発せざるを得ない。最大の困難はこのあたりだ。

体のまわりに三次元の座標軸を設定し、手首、ひじ、肩などの位置を定め、座標の中の移動として行動を記録するといった方式を含め、これもひとつの、あるいは文字通りの行動計量学なのだと思いつつ、仲間とあれこれ試している。

（日本行動計量学会会員・国立国語研究所員）

編集後記

▼春ともなりますと、ものみな動き始めるようです。名古屋の大会の準備も軌道に乗っています。講習会も開かれます。刊行物委員会の企画によるシリーズ出版物も、いよいよ今年は実現するとか。

▼ただ気になりますのは、和文誌の発行が遅れ気味な点ですが、編集委員のご努力により、これも間もなく、皆様のお手もとに届くことだろうと思います。

▼会報担当幹事の林俊一郎氏（慶大・医）は、昨年十一月に、国際技術援助チームのリーダーとして、ペルーに行かれました。当分の間は、江川、山本の両名で会報を担当いたします。

▼月例シンポジウムを、第一回より、リストアップしてみました。改めてその内容を見ますと、さすが、学術的学会の名に恥じぬバラエティさに富んでいると感じさせられます。これからもさまざまな企画がなされると思いますが、月例シンポジウムに対する皆様のご意見を希望するテーマなどを是非お寄せ下さい。（山本）

学会費納入のお願い

五十六年度を迎え、学会費納入の季節となりました。早目にご納入ください。正会員は四千円、準会員は二千五百円です。本年度以前の分を滞納している方はそれも加えてください。送金は、郵便振替（東京八—一四八〇五六、日本行動計量学会）でお願いします。

◎会員数（三月二十日現在）
（正）九一八人（準）一五五人
（賛助）　三一法人